

本朝二十不孝の方法：『二十四孝』説話を手懸に

井上，敏幸

<https://doi.org/10.15017/12191>

出版情報：語文研究. 31/32, pp.149-163, 1971-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『本朝二十不孝』の方法

——『二十四孝』説話を手懸に——

井上 敏幸

はじめに

『本朝二十不孝』という作品が取上げられる時、常に最大の問題点として論じられるのが、西鶴はどのような創作意識でもってこの作品を書いたかであった。従来の研究では、孝道奨励を謳った將軍綱吉治下の思想的トピックとして書いたとする点、及び不孝咄集という読者の意表をつく着想の西鶴的奇抜さを認める点において諸論は一致しているが、序の「孝にすゝむる一助」という言葉をめぐる、現在三つの見解が対立している。

その一は、西鶴の序の言葉を一種のカムフラージュと見て、將軍綱吉の二重人格の孝道奨励政策を批判したとする見方、二は文字通り教訓的姿勢、あるいは談理の姿勢を認めようとする見解、三は、その教訓的言辞を単なる常識に過ぎないものとし、西鶴の創作意識の真意を、常識的教訓をいかに面白く語るかに、つまり、西鶴の戯作意識を読みとらねばならないとする説である。^{注1}この三つの見解のどれが西鶴の意図したものであったかを決定しうるものは、作品の具体的分析以外にありえないことは、今

更いうまでもあるまい。だが、不思議なことに、具体的作品の分析を通じてこの問題を追求した論考を見出しえないのが現状なのである。

そこで、いま『本朝二十不孝』なる題名にたちかえつて、『二十四孝』説話が（『二十不孝』の題名が『二十四孝』の四の一字を不に置きかえるという奇抜な西鶴的着想によることは、述べた如く諸論の等しく認めるところ）、具体的作品に実際に生かされたかどうか、生かされたとすれば、それは如何なる方法として生かされ、また意識されたのであったかを、具体的個々の作品にあとづけることによつて、前述した西鶴の創作意識をめぐる問題への出発点としようというのがこの小論の目的である。ところで、『二十不孝』と『二十四孝』説話との関連は、既に指摘されており、特に徳田進氏は、『二十不孝』のほとんど全篇にわたつて『二十四孝』説話の逆設定を指摘されたのであったが、孝子伝研究を目的とされる氏は、あくまで『二十四孝』説話の話柄にそつた逆設定としての不孝譚を追及されたため、『二十不孝』のほとんどが、反『二十四孝』譚となつてしまい、

西鶴研究の立場からは、とうてい承服しがたいものとなつてゐる。従つて、この小論では、徳田氏の指摘を考慮しつつ、西鶴が明らかに『二十四孝』説話を意識したと思われる作品に限つて、『二十四孝』説話が如何なる方法と意識のもとに実際の作品に生かされているかを、次の三つのグループ、一、『二十四孝』説話の逆設定が、咄の構成を支えており、それ自体が一篇の方法となりえているもの。二、『二十四孝』説話を俳諧の付合語として認識し、そしてその逆設定を俳諧的連想によつて一篇の構成としたもの、また、『二十四孝』の挿絵を直接のヒントとし、その逆設定が俳諧的連想によつて纏められたもの。三、『二十四孝』説話の逆・順の設定が、演劇的着想によつて、または、演劇的手法によつて生かされたもの。に分けて検討することにする。

ただし、紙幅の都合上、本稿においては、その方法の検証に主眼を置き、その方法から帰納される西鶴の創作意識に関しては、単にその方向性を記すにとどめた。

一

まず、一、『二十四孝』説話の逆設定そのものが一篇の方法となりえているものから検討していく。冒頭巻一ノ一「今の都も世は借物」に、やはりそれは典型的に示されている。

咄は、死一倍を借りた息子のすさまじい不孝振りと、その酬いを描いたもので、今更縷説するまでもなく有名なものであるが、簡略に一篇の構成を説明しておくと、先ず「世に身過は様々なり」と、珍奇な職業が、例の物尽しの口調で綴られる序に

相当する部分が、全体の $\frac{1}{4}$ を占める。次に珍しい商売の一つとして死一倍を扱う長崎屋伝九郎が紹介され、続いて浮世狂いに狂奔する主人公笹六が登場する。長崎屋の手代と笹六の会話を中心に死一倍の実態が浮彫にされ、更にこうした悪所銀の散り失せていく様を活写する。一篇の中心的部分で全体の $\frac{3}{4}$ 強を占める。最後衰弱に至つて死一倍を背負つた息子が父親を毒殺せんとして却つて自分の命を落すという結末が描かれる。

さて、西鶴はこの一篇の咄の眼目をどこに置いたか。従来の解釈では、現実社会に実在する人間悪そのものとしての死一倍を指弾することであつたといふことになりそうだが、そうではなく、結末の、息子が親仁の命を短かく祈り毒殺せんとする所にその眼目があつたと解したい。それは、親仁の命を短かく祈り毒殺せんとする行為こそが『二十四孝』説話の逆設定に他ならないからである。

このことについて、笠井清氏は「父親を毒殺しようとして、毒薬をかみくだいて死亡する不孝息子のことは、二十四孝の漢の文帝が母の服薬に先だつて自ら試みた説話からヒントを得て、逆用したものかも知れ」ないと夙に指摘された。また徳田氏は「蕩児父の早死を祈つて、家督相続の出来ることを願う」「夷黔婁型の逆（反祈願譚）」と説明された。確かに両氏の説かれる如くであるが、詳細に検討していった場合、夷黔婁説話の逆用が中心的に用いられていることがわかる。『二十四孝』の漢文帝、及び夷黔婁説話と、この一篇とを比較してみることにする。

漢文帝説話とは、御伽草子『二十四孝』によれば「仁孝臨^{しんぎやう}二天^{てん}下一^{いち}巍々冠^{ゑいぎん}二百王^{にひやくおう}」漢廷事^{かんていじ}賢母^{けんぼ}湯藥^{とうやく}必親嘗^{かならずおこなはせ}」なる詩に、平

易な仮名文の説明が付けられたもので、必要な部分を引くと、
「漢の文帝は（中略）母薄太后に孝行也。よろづの食事を参らせ
らる、時は、まづ自らきこしめしこゝろみ給へり云々」の如く
である。

『二十不孝』の「年比拵へ置し毒薬取出し。是氣付ありと素
湯取よせ嚙碎き覺えず毒の試して」の部分がこの説話に相当す
る。この両者を比較すれば、「覺えず毒の試して」に当るのは、
仮名文よりも詩句「湯薬必親嘗」である。とすると、笹六が自ら
毒薬を試みる行為そのものは、漢文帝説話の逆用ではなく順用
だということになる。『本朝孝子伝』には、「薬必先嘗」「湯
薬必親嘗」「湯薬親嘗」の如く、この詩句が頻出する。漢文帝
の説話というよりも、孝行を標示する当代の慣用語と解してよ
く、西鶴もこの部分をこの詩句に依拠したと見るべきであろう。
今一つの庚黔婁説話は、「（なつとにたじやんちやるといふやまふかき）
願將レ身代レ死 北望啓「憂心」という詩句に、「（前略）父の
病み給ふかと思ひ、官を捨て帰りければ、案の如く大に病めり。
黔婁、医師によしあしを問ひければ、医師、病者の糞を嘗めて
みるに甘くにが、らばよかるべし」と語りければ、（やまふかき）
「黔婁やすき事なりとて嘗めてみければ、味はひよからざりける程に死せん
ことを悲しみ、北斗の星に祈りをかけて、身代りにたゝんこと
を祈りたるとなり」という仮名文の付いたものである。『二十
不孝』のこれに対応する部分は、「いよ／＼親仁の無事を歎き
江州多賀大明神に参り親の命を短折れど。何をか聞し此神は寿
命神なれば。なを長生を恨み諸神諸仏をたゝきまはし。七日が
うちにと調伏すれば願ひに任せ親仁眩暈心にて」である。庚黔

婁の「死せんことを悲しみ、北斗の星に祈りをかけて、身代り
にたゝんことを祈るが、「いよ／＼親仁の無事を歎き江州多
賀大明神に参り親の命を短折るに、更に「なお長生を恨み（中
略）七日がうちにと調伏す」る、の如くに逆転される。

ところで、こうした『二十四孝』説話の、いわば枢要部をの
み採る説話認識の方法を、西鶴は俳諧の世界において身につけ
ていたのではなかったか。『類船集』によれば、庚黔婁説話は
次の二つの形で出てくる。^{注9}

A 黔婁が親の身にかへらんと北辰をぬかつきしハ孝の心也。
（北斗の項等）

B 庚黔婁か父の病に糞の甜苦をなめしが味甜滑なりとて身を
もてかへらんと願ひし也。（甘の項）

『類船集』Aの形は、上述した如く西鶴が逆転させた庚黔婁説
話傍線Aの部分にそのまま重なりとてよい。また『類船集』
Bの形を想定すれば、「糞の甜苦をなめて」という異常な行為
は、笹六の異常な（むしろ迂闊な、滑稽な）行為「毒の試して」
という場面をそのまま引き出して来るといってよい。「湯薬必
親嘗」という孝行の代名詞ともいへば漢文帝説話が云々され
るのは、糞を嘗めるといふ奇異な行為が、逆に一般的孝行の代
名詞としての詩句へ類推された結果での論なのではなかったか。
作者西鶴にすれば、『類船集』Bの形があれば笹六の結末は十
分に引き出したと思われる。庚黔婁説話が重要視される所以
である。

ここで、この『二十不孝』の結末「弱の部分」が、一篇の中で
どのような役割を持つかを確めておくと、冒頭から「強の部分

は、いわば結末を導き出すための伏線部であつたと解される。

「笹六美男を俄に逆襲にして身を見るるしうなし。今年廿六なるを三十一になりますと。知れて有年をまぎ／＼と五つ隠されし（中略）さりとては不思議、晴ざりし」といふ笹六の不思議な行為、手代との会話の中に「持病に目舞殊に次第肥は中風下地。長うとつて五年か三年外にし、まふてやる思案も有」りという思案、また末杜達の「あの親仁様の葬礼を頼みに。此大臣に御奉公申」すという露骨な期待の全てが、「親の命を短」く調伏し、その願いがかなつたといつては、心踊らせつつ毒殺せんとする人間としてのおよそ極限の悪が、笹六の行為そのものとして展開され、そして息づく暇もなく、その笹六の期待は自らの死へと逆転させられる。この五行に及ばぬすさまじい悪の実行と逆転、これこそがこの一篇のクライマックスであつた。

つまり、西鶴は、庚黔婁説話の逆転を、この一篇の最後のクライマックスの部分数行に、集中的に用いることによつて、全ての伏線を雲散霧消させ、一篇を緊密な作品たらしめることが可能だったのである。一篇の限られた部分、しかもその枢要部における『二十四孝』説話の集中的逆転、これこそが『二十不孝』における、西鶴の一つの基本的方法ではなかつたか。

『二十四孝』説話の逆設定が、『二十不孝』の咄の性格、内容をも規定するというのではなく、『二十不孝』の咄を、西鶴的咄として成立させるカラクリ、西鶴的咄をはじき出す一つのパネの役割として用いられていたのである。従つて、そのパネの力が強ければ強いほど、西鶴は、その一篇の中に、いわゆる西鶴的といわれる様々の世界を展開することが可能だつた筈であ

る。

『二十四孝』説話の逆設定は、以上の如き意味において『二十不孝』における一つの方法たりえたと考えられるのである。この西鶴の方法が理解されれば、笹六のすさまじい悪の実行と逆転は、決してリアルな描写ではなく、極端なまでに拡大され、滑稽化されたそれであつたことも、合せて理解されよう。

以下、簡略に卷一ノ一と共通した方法を持つと思われる作品を、一二見ておくことにする。

卷二ノ四「親子五人仍書置如件」は、『二十四孝』田真・田広・田慶説話の逆設定を主要な構想とし、それに俗諺「四十二の二つ子」をからませた一篇である。

善左衛門は、「世の聞え斗にない金子を書置する事ぞ」と二千両の有金を八千両とし、息子四人に二千両づつと書置して死ぬ。二男善助がこの父親の書置を疑いだし、弟善吉・善八を語らい、これは兄善右衛門が親仁を詐したに違いない、と兄を責める。兄はこれを苦に四十二で自害。

その後三人で蔵を捜すが金は二千両の外にない。捜しあぐねた三人が蔵の中で寝ている所を、善右衛門の女房が、二才の善太郎に敵を打たせる形で三人を殺害し、自らも果てる。

この一篇に關した『二十四孝』説話は、「田真・田広・田慶兄弟は、親の遺産を三分したあと、庭の紫荊樹をも三分せんと終夜僉議する。夜が明けると樹は急に枯れていた。三人は自分達の欲心を反省し、わかつたずに置くと、紫荊樹は再び栄えた。」というのである。この両者を比べると、まず、遺産相続にあつた兄弟の争いという共通の話題を扱っていること、また、田真

・田広・田慶の三兄弟に対し、善助・善吉・善八という類似した名前をしつらえていることに気付く。そして「庭前の紫荊樹をも三分せんと終夜僉議する」の部分で、「二男善助七日もた、ぬうちより悪心起り香花をもとらず十露盤枕にして思案をめぐらし。善吉・善八をまねき此程つく／＼おもふに。いかにしても此家に式千両ばかりの有金世上にも誠にせぬ事なり。是は善右衛門親仁を詐しかくは書置をさける。(中略)是非書置の通り金子請とれと申出せば」、善吉・善八も「善右衛門にくし」と兄に責めよる、の如く逆設定されていく。「二十四孝」の架空な紫荊樹を、現実社会のどこにでもありそうな八千両の金に置きかえ、「欲に目の見えぬ若者」の心理を鋭く剔出する。そして、田真・田広・田慶が紫荊樹の不思議な現象に思いを致し、自分等の行為を反省するのに対し、善助・善吉・善八は、「欲に目の見えぬ若者」なるが故に、兄善右衛門を自害させ、やがてはその酬いとして死を蒙るという形に逆転される。まさに、「二十四孝」説話の逆設定を骨子としたストーリーの展開だといわねばならない。咄は、これに「四十二の二つ子」という俗諺による因果咄をからませたものなのである。

以上のことが理解されてはじめて、この一篇の末尾に、「家栄へ家滅ぶるも皆これ人の孝と不孝とにありける」なる教訓的言辞を付した、西鶴の意識が明瞭になる。「二十四孝」説話の兄弟三人の反省は、当時「わかちとらハ親の名まで。くださん」の如くに賞揚された。西鶴は、通俗的解釈を突き破って、欲心という人間本能を貫徹させたものではあったが、少くとも「二十

不孝」創作の時点では、人間本能としての欲心そのものを追及するという創作意識を持ちえなかった、否、そういった意識をあえて持とうとしなかったといわざるをえない。それは「家栄へ家滅ぶるも皆これ人の孝と不孝とにあり」とする西鶴の言辞が、明らかに「二十四孝」説話の教訓を取り入れたものであり、また、自らが序文に掲げた「不孝咄を書いて孝の一助とする」というテーゼに縛られたものであったと考えられるからである。

この「孝の一助」とするという自らが掲げたテーゼと、「二十四孝」の逆設定として不孝を語るといふ方法との矛盾を、精確にはじき出すことが、『二十不孝』における西鶴の創作意識を捉える最も基本的作業なのではなからうか。¹²

今一つ、巻五ノ三「無用の力自慢」も「二十四孝」山谷説話の逆設定を一篇の方法としたもので、咄は、歴々の町人の息子が相撲にこり、あげくの果に、「親達に足をさすらせ大小便とられ」る不具者になってしまったというのである。これは、高い身分にもかかわらず母の大小便をとったという山谷説話の逆転を、一篇の結びに用いたものに他ならない。その末尾には、「もったいなくも親達に足をさすらせ大小便とられ。冥加につきし身のはて親のばちあたりと名のりける」の如く、落ちがつけられており、前半の相撲についての細叙と相俟って全く一篇の笑話というべきだが、『二十四孝』説話の逆設定が、わずかに『二十不孝』の一篇たる条件を与えたと解すべきであろう。¹³

二

次に、二、『二十四孝』説話を俳諧の付合語として認識し、

そしてその逆設定を俳諧的連想によって一篇の構成としたもの、また、『二十四孝』の挿絵を直接のヒントとし、その逆設定が俳諧的連想によって纏められたものを検討する。

卷二ノ一「我と身をこがす釜が淵」は、有名な石川五右衛門親子の釜茹での咄を扱ったものである。「鏝の釜の穿出し今の世にはなかりき」と、『二十四孝』郭巨説話の引用に始まるこの一篇の方法は、次の如きものではなかったか。「鏝の釜の穿出し」という『二十四孝』の孝行譚など、今時どこを捜したとてある筈はない。今の世の釜に関する咄とは、不孝譚の典型としての石川五右衛門の釜茹でぐらいなものだといって一篇を綴った、と。郭巨説話の「鏝の釜」を五右衛門の釜に置きかえる、この単純明快な一つの着想が、この一篇の咄の大筋を決定した。まさにそれは、『二十四孝』の四の一字を不に置きかえる着想そのものだといつてよい。咄の根幹を得た西鶴は、あとは俳諧的連想を駆使して枝葉をつけていくだけである。具体的にしていけば、五右衛門↓盗人↓近江(類船集・近江の項)という連想で咄の舞台が決定され、一子五右衛門のために落ちぶれ、今は大津・矢橋間の渡船の船頭となった父五太夫の悲惨な境涯が近江↓鏡山↓志賀↓勢田(類船集・近江の項)という連想のもとに綴られる。五右衛門が「盗人の司」となっていく過程で「関寺の番内・坂本の小虎・音羽の石千代・膳所の十六(中略)繩すべりの猿松・窓ぐりの軽太夫・猫のまねの闇右衛門等々」とその配下の戯名を連らねる一条は、まさに西鶴得意の部分であつたに違いない。また「都にて昼中鐘を三人ならびの手振を先に立。其身は乗馬跡より挾箱持沓籠歴々の侍と見せて見分に

まはり。大盗の手便をして」の一条は、『類船集』「盗人ハ宵の間に見つくるひ置とよ」(宵の間の項)の一文が連想されれば引き出したに違いなく、更にその一味が捕縛される部分「三百余人の組下石川が掟を背。昼夜わかちもなく京都をさはがせ。程なく捕れ」も、『類船集』の一文が有効に働いていると見てよい。¹⁴一篇の結末、「七条河原に引出され。大釜に油を焼立是に親子を入れて煎れにける」は、『類船集』釜の項の付合語「子を埋」なる一語と、「加茂川の下に釜が淵といふは石川五右衛門を煎たる釜のながれとまりしと也」¹⁵の一文に依ればよかつたのである。西鶴は、郭巨の孝の実践としての「子を埋」を、五右衛門の悪業の酬いとしての「其身の熱を七才になる子に払ひ逆も通れぬ今の間なるに一子を我下に敷く」という悲惨な光景に置きかえたのである。まさに電撃的連想のもとに綴られた一篇だといわねばなるまい。『二十四孝』説話の逆転をヒントに、俳諧的連想そのものが一篇を構成する方法たりえたとする所以である。

猶、徳田氏は郭巨型の逆・反献身譚とこの一篇を規定されたが、西鶴が逆転したのは、『二十四孝』説話の内容にそつたそれではなく、釜という言葉そのものにポイントを置いた逆転だったのである。

このことを何よりも雄弁に物語るのが、他ならぬその挿絵である。(図版Ⅰ)『二十四孝』の黄金の光を放つ釜と、『二十四孝』の炎になめられる釜。埋めずに済んだ子を抱きかかえる図と、子を釜の底に敷こうとする図と。西鶴がこの一篇に置いた創作の主眼は、まさにこの挿絵に言い尽されているといつて

過言ではあるまい。

卷二ノ一の挿絵に、『二十四孝』の逆設定という西鶴の方法を読みとらねばならないことを言い添えたが、両者の挿絵を見較べていった場合、西鶴は、むしろ『二十四孝』の挿絵にヒントを得て、『二十不孝』の一篇を綴ったと思われるものがある。

卷三ノ三「心をのまる、蛇の形」の挿絵と『二十四孝』楊香の挿絵とがそれである。(図版Ⅱ)楊香の孝に感じて「尾をすべて逃げ退」く虎の図と、不孝者武太夫の一子武助を飲み込もうとする竜の図とは、まさに孝行↓虎(楊香説話をさす、筆者注)↓竜(類船集・虎の項)という俳諧的連想を軸とした、孝子譚から不孝譚への逆転そのものだといわねばならない。親子

図版Ⅰ

二十四孝



本朝二十不孝



二人の人物に竜虎を配した図柄の類にも、両者の関連を物語っていると解される。つまり、西鶴は虎を竜に置きかえ、あとは竜からの連想をたどつて不孝咄を組立てたのである。竜↓淵↓玉(類船集・淵の項)という俳諧的連想が生む説話に依りかかつて、玉を漆に置きかえ、漆↓奥国(類船集・漆の項)という連想によつて、「関東北部から奥州に伝へられる民譚「赤淵の朱」、またはその類話」を念頭に置いて、自己の一篇の不孝譚を創作したのではなかったか。

図版Ⅱ

二十四孝



本朝二十不孝



卷四ノ四「本に其人の面影」も、やはりその挿絵が注目される。(図版Ⅲ—D)

一篇は、父を亡くし母をも亡くした兄弟の前に、母親の幽霊が現われる。兄は何故に成仏しないかと嘆くが、弟は半弓で射その幽霊の正体をあばく。人々は弟の勇気を褒めるのであったが、国守は人々の判断とは逆に、兄を賞し弟の行為を親への敵対として罰する、という咄である。この出典は『宇治拾遺物語』^{註18} 卷八「獵師ほとけを射る事」とすでに指摘されている。(図版Ⅲ—B)^{註19}

ところで、『類船集』狸の項には、B「弥陀の来迎をして狸の人をたぶらかした事有」の形でこの説話が出ており、西鶴がこの形で『宇治拾遺』の説話を記憶していたであろうことは十分に推測される。とすると、『二十不孝』の咄は、D「狸が母の姿をして二人の息子をたぶらかした事」となる。特にこの両者の人物関係が、無智なる聖を孝なる兄作弥に、賢い獵師を不孝者第八弥にと見事に逆設定していることに気付く。たしかに両者はB↓Dという形で逆転だったと解される。だが問題は、『二十不孝』の一篇としての作品に、何故「宇治拾遺」のこの説話が採用されたかである。

この問題を解く鍵は、『二十四孝』刺子説話の挿絵である。(図版Ⅲ—A)。この挿絵は、刺子が「鹿の皮を着てあまたむらかりたる鹿の中へまぎれ入侍れば、獵人これを見て実の鹿ぞと心得て弓にて射んとしけり」の部分を描いたものであり、この絵を『類船集』のいい方に直せば、A「刺子が鹿の皮を着て獵

人をたぶらかした事」となる。これに対し『二十不孝』の挿絵は、まさに「狸が母の姿をして二人の息子をたぶらかした事」(D)と読める。とすれば、このA↓Dの連想の中間項として

『宇治拾遺』説話が要求されてくる。つまり、

A 刺子が鹿の皮を着て獵人をたぶらかした事

← B 狸が弥陀の来迎をして獵人をたぶらかした事

← D 狸が母の姿をして二人の息子をたぶらかした事

というA↓B↓Dの連想過程である。このBを中間項としたA↓B↓Dの転換は、咄の内容を考えた場合、極めてスムーズなそれといつてよいが、図版A↓B↓Dの転換は必ずしもスムーズではない。ここで思い合わされるのが「うぶ女」の伝説とその挿絵である。(図版Ⅲ—C)『御伽物語』卷三ノ一の挿絵は、C「狸がうぶ女となつてかつての男をたぶらかした事」と読める。殊にその構図の類似性は注目されねばならないであろう。このCを中間に置いた図版A↓B↓C↓Dの転換は、極めてスムーズな流れなのではあるまいか。

この図版A↓B↓C↓Dの流れを考えた場合、西鶴のこの一篇における創作過程は自ら明らかになってくる。鹿の皮をかぶった刺子(A)が、弥陀の姿の狸(B)↓うぶ女姿の狸(C)と連想され、母の姿の狸(D)と見事に逆転されたのであり、聖の図(B)が、兄作弥(D)に、そして弓を引く獵人(B)が、半弓を引く男(C)に置きかえられ、半弓を引く弟八弥(D)が出てくるのである。

また、この咄の舞台が松前に設定されたのは、『類船集』蝦夷の項の付合語、鹿の皮↓半弓↓松前という俳諧的連想によるものだったのであり、母親の幽霊現出の部分も、親↓無人↓俳↓乱髪↓幽霊（類船集・俳の項）という俳諧の付合語による叙述だったのである。以上の如く、挿絵に発想のポイントを置

き、俳諧の付合語によって一篇を綴るという方法は、『二十不孝』における有力な一つの方法であったと認められるのである。『二十四孝』の逆設定という西鶴の直感的閃きを、感覚そのものとして伝えうるのは、実に、これらの挿絵を持つ作品だったのである。

図版―Ⅲ

㉔ 二十四孝



㉕ 御伽物語



㉖ 宇治拾遺物語



㉗ 本朝二十不孝

次に、三、『二十四孝』説話の逆・順の設定が、演劇的着想によつて生かされたもの、または、演劇的手法によつて生かされたと思われる作品を検討する。

巻四ノ一「善惡の二つ車」は、その舞台を備前岡山に定めた孝と不孝との咄である。

甚七・源七の二人は、それぞれ広島長者といわれた親の財産を十年余りに蕩尽し、親兄弟の難儀を顧みず出奔する。路頭に窮した二人は岡山で乞食となる。心学の盛んな土地柄を考え、非人をかたらい、甚七は片輪車を作り七十過ぎの老人を乗せて、源七は老人を背に負つて袖乞する。人々の同情を買つて貰ひは多く、各々庵を作り生活する。源七は格別に老人を労るが、甚七は終夜蚊を払わせ、眠つたといつては虐待する。ある日、甚七を恨み思いつめた老人が、源七に身の上を語り死後の取置を頼んでいる所に、馬乗物を連ねた旅人が通りかかり、この老人を見て親子の名乗りをあげる。息子金弥は、長の浪々生活の果に、東国方の大名に五百石で仕官がかない、五十日の暇をもらつて父を捜しに來たことを告げる。金弥は戻つてきた甚七を捕え、庵を崩して追つたて。そして親と源七と今一人の老人を駕に乘せて東国へ下る。

この咄のポイントが、「野臥の非人をかたらし甚七は片輪車をつくり」「源七も年老たる者を履て」袖乞する点にあることはいうまでもあるまい。他人同士が親子を装うという発想は、孝子譚三州義士説話として『今昔物語』以来種々喧伝されたもので、西鶴のこの一篇も説話の系統としては、これに属するものとせざるをえないが、この咄の創作にあたつて西鶴が依拠し

たものは、もっと現實的・近世的素材であつたといわねばならない。

源七が老人を背負つて袖乞する咄は、『明良洪範』巻一に、寛文末年頃、老母を背負つた非人がお上のお褒を受けたことを伝え聞き、「奸惡の者母を負て往來する者あり（中略）仮に雇たる母なれば日暮に及べば東西に別れ去る其時貰ひ米錢の数を互に論じ握み合などしける」と伝える一件に付合する。また甚七の片輪車の着想は、『二十四孝』董永説話「父さて足もた、されば、小車をつくり父を乗せて、田のあぜに置いて養たり」の小車によるのだが、西鶴が用いたものは『二十四孝』説話そのものではなかつた。説經正本「石山記」に、「されはとよ春、（中略）もろこしのとうゑいかこうをかんして、七しゆんにおよひしらう母を、つちくるまにのせ参らせ、濱に立出しほをやき、うき年月をおくらる、」とある如く、既に翻案された董永説話の土車を、つまり説經淨瑠璃という近世的感覺での土車を採用したのである。説經正本には、土車の挿絵がしばしば登場し、西鶴及びその読者にとつて、それは極めて親しみ深いものだったに違いないからである。『二十不孝』の挿絵と「さんせう太夫物語」の挿絵を比較すれば、このことは直ちに納得されるであらう（図版Ⅳ）。

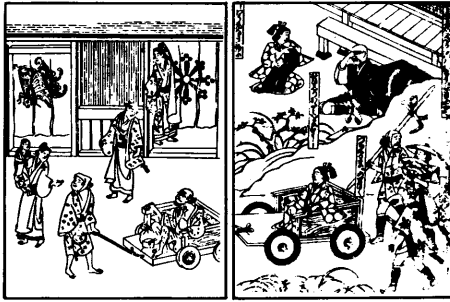
更に、ここでの咄の舞台が備前岡山であることに注目すると、「其比備前は心学盛にして人の心も直になり。主人に忠ある人親に孝ある者は御恵み深く。おのづから其道に入て国の治る此時なれば」という一文が問題になる。『本朝孝子伝』巻下近世の部には、備前の国の孝子が多く出るが、その第八「柴木

村甚介」の伝と、それらの伝に添えられた論とがこの一篇にかかわってくる。

甚介は母に至孝であった。兄は不孝者で、母は弟の舍で生活する。父が死んだ時、兄弟は田廬を分付されたのであったが、兄は程なく破産、弟は力を尽して兄を救つてやる。弟は光政より御褒をうけ、子孫に至るまで輪賦を罷ぜられる。儒臣蕃山も甚介の舍を訪れ、その孝行振りを歎賞した。(原漢文)

この母に仕えて至孝なる甚介(甚介と甚七の類似にも注意)と不孝な兄の組合せは、三州義士説話が、一人を親とし二人が子となつて孝を尽すという形であるだけに、善悪二人の人物の設定は、この『本朝孝子伝』によつたというべきではなからうか。

図版Ⅳ



本朝二十不孝

さんせう太夫物語

そしてこの伝に添えられた論、「人皆言備州多^シ孝子婦^ニ、豈止^ニ孝子婦也^ニ、忠臣義者^ヲ亦不^レ少^ク、(中略) 親^ニ孝子^ヲ、聞^ニ悌弟^ヲ、則必賞^ス之^ヲ、以^テ金穀^ヲ、(中略) 故^ニ (中略) 亦皆靡^レ不^レ自然感^ニ旦化^ニ焉^ヲ」は、『二十不孝』の一文に酷似するといわねばならないであらう。

以上の如く見てくれば、三州義士説話の流れが、たどえ意識されていたとしても、西鶴が直接素材としたものは、彼の手の届く範囲での現代的世界だったのであり、この近世的人間風俗の中で、和悉された『二十四孝』説話を如何に有効に働かせるかということが、まさに一篇の眼目となつてくる筈である。

とはいへ、董永の引いた小車を不孝者甚七に引かせ、その虐待振りを呉猛説話の逆—終夜蚊をはらわせる—という形で設定したとしても、それらは、『二十不孝』の一篇たる条件を満たしたに過ぎないのであつて、決して一篇の咄の展開を支えている訳ではない。この咄の展開を支えているものは、土車の趣向をもつ説経浄瑠璃「さんせう太夫」に他ならないからである。

説経浄瑠璃「さんせう太夫」は、長者の没落譚と、これに伴う対王丸の不思議な立身譚を以て形式を調へたものといつてよい。この一篇と比較してみるに、広島で長者といわれた甚七・源七が、各々家財を蕩尽し、乞食にまでなり果てる条は、まさに長者没落譚であり、『さんせう太夫』の土車には、奥州五十四郡の国守いわきの判官まさうちの惣領つしわうが乞食姿で乗つていたのだが、『二十不孝』では、越後の由緒正しい七十過ぎの侍が、浪々の果てに乞食姿となつて乗る。両者共に由緒ある人間が仮に乞食となつて世を忍び、開運の日を待っている姿なのである。また、世に出たつしわうが、山庄太夫一族の処置

を終え、「ち、うへやは、上を。あしろのこしにのせ参らせ。さてまたいのちのおやのおひじり様。いせのこはぎもそれだ」に。こしやながえにのせ給ひ。其身は馬にめされつゝ、十万よきを引ぐして。みちのくさして下らせ給ふ」という結びと、老人の息子金弥が、浪々の果てに東国かたへ仕官がかない、この老人を尋ね出し、甚七をこらしめた後、「源七は此たびの心ざしを感じ、我抱へ申べしと今老人の乞食も老足なれば駕籠に乗東路に下りぬ」、のハッピーエンドとはまさに符節を合わせるといつてよい。

この一篇における西鶴の方法とは、まず『本朝孝子伝』により舞台を備前岡山と定め、孝子董永を不孝者甚七に逆転し、『二十不孝』の一篇たる条件を満たし、董永の小車を説経浄瑠璃に多出する土車と取り更に当世風の片輪車に仕立て、咄を『さんせう太夫』一曲の筋書通りに展開させるという方法であった。結局、挿絵の片輪車に焦点を置いた一演劇的着想を利かせた一篇であつたといつてよく、その挿絵を生かした、極めて感覚的な方法は改めて注目されねばならないであろう。

巻五ノ一「胸こそ踊れ此盆前」は『二十四孝』説話の順用を、演劇的手法に託した一篇だと解される。

咄は、盆の借金取にせめられる母の苦勞をよそに、踊の稽古に熱中し、母に叱られると雪踏を投付ける不孝娘と、自分の持物の全てを売払つて孝行を尽す娘とを描いたもの。

徳田氏はこれを伯爺型の逆・反泣杖譚とされたが、この一篇における不孝娘さんの位置は、むしろ脇役であり、主人公は惣

領長八の娘の孝行譚にある。この孝行娘の造形には『二十四孝』唐夫人説話の順用が考えられるが、西鶴が意を用いた点は、娘・娘の孝と不孝との対照的描写にあつたのではなく、『二十四孝』蔡順説話に依る借金取の奇跡的行為の描出にあつたのである。つまり、この一篇の眼目が、「角なき鬼の白つきして」すこむ掛乞が、娘の孝心に感激し、借金取のことを忘れ、自分の「財布の口をあけて銭貳貫三百、細金五十目ばかり」を置いて帰る、この商人のまさに奇跡的な急変に存するからである。^{註30}

蔡順説話は、赤眉の乱の折、蔡順が桑の実を拾ひ、熟した実を母のために分けているのを知った盜賊が、その孝に感じて米二斗と牛の足一つを与えて去つたというのである。両者を比較すれば、「人を殺し剥ぎ取りなどする」「心づよき不道の者」、赤眉の賊を、「角なき鬼の白し」た掛乞とし、「彼が孝を感じて米二斗と牛の足一つを与へ」た部分を、掛乞が「銭貳貫三百、細金五十目ばかり」を与えて帰つたと、商人にふさわしい行為に置きかえた訳である。こういつた形での『二十四孝』説話の順用による咄のカラクリの上に、不孝娘・孝行娘が極端とも思われる対照的な形で描かれているのであり、至孝な娘の傍に唐夫人が、また不孝娘の行為に伯爺泣杖の逆転があるとしても、一篇の咄の構成からすれば、それらは西鶴にとつて明らかに二次的関心事でしかなかった筈である。

ところで、赤眉の賊を掛乞とし、この掛乞をいわば咄の進行係として活躍させる方法を、西鶴は一体何にヒントを得たのか。具体的資料を持ち合せないが、これを演劇的手法だと解したい。^{註31}つまり、観客にはその人物の存在を知らせながら、ドラマの中

心人物達には気付かせないままにドラマを進行させ、或時点において突如その人物をドラマの中心へ投込むことによって、そのドラマを更にドラマティックなものにするという方法なのではなかったか。貞享年間の西鶴が、演劇にいかにか深い関心とかかりを持っていたかはすでに先学の説くところである。^{註32}とすれば、この一篇の方法は、蔡順説話の盜賊を掛乞に順用するという着想を演劇的手法を取入れることによって、一篇の構成に据えたということになるのではなからうか。

むすび

『二十四孝』説話を明らかに意識したと思われる八篇の作品について、それらの説話が如何なる方法となりえたか、また、如何なる方法のもとに生かされていたか、を検討してきたが、西鶴が用いた方法は、いうまでもなくこれらに限られたものではなかった。『二十四孝』丁蘭説話との関連が考えられる巻三ノ四「当社の案内申程おかし」は、鎌倉の頼焼阿弥陀伝説を採用した創作であったと解され、当然ここにはまた別の方法が考えられる。また、巻三ノ一「娘盛の散桜」は、「親にそむく」(類船集・家を出るの項)という一般的不孝の観念をテーマに、あとは地名に関した言葉の連想によって、またたくまに一篇が構成されたと考えてよく、この一篇は『二十四孝』との関連が考えられないにもかかわらず、二章に検討したものと同じ方法が採られていたのである。このことは、『二十不孝』の他の作品の方法を検討する際、特に注目されねばならない事実であろう。が、今は全て省略に従った。

ところで、以上の検討によって、西鶴が確かに『二十四孝』説話を素材としていたこと、及び、それらの素材が一篇の中心的方法として、または一つのヒントとなつて、様々の西鶴的方法を引き出していたことも証明しえたと思えるのであるが、問題は、『二十四孝』説話を用い、様々の方法のもとに創作を試みた西鶴の創作意識がどこにあったかである。

詳述するゆとりを持たないが、以上の検討の結果からすれば、西鶴の『二十四孝』説話の用方は、極めて戯作的な意識であつたといわざるを得ない。つまり、「はじめに」で述べた三の戯作的な方向である。しかし、『二十四孝』との関連が、単なる戯作的なそれに限られたものでなかつたことは、たとえば、巻二ノ四が、『二十四孝』説話から一篇の構成を引き出すと同時に、教訓をも引き出してきていたことや、むしろ孝行婬に焦点をあてるべく『二十四孝』説話を踏まえた巻五ノ一などを考えてみると、二の教訓的、談理の姿勢も見逃せないものとなる。それは、これらの作品の中に、単に常識的教訓を面白く語つたとして片付けることのできない、作家西鶴の姿勢が窺えるからである。『二十不孝』の創作を思ひだつた、そもその時点で、西鶴が『二十四孝』を強く意識していたであらうことは、当然考えなければならぬことであつて、その『二十四孝』に対する意識が、不孝咄を集めて、それでもつて「孝の一助」としなればならないという意識とが重なりあつた場合、巻二ノ四・巻五ノ一などの作品が作られるのは、むしろ自然なことなのではなかつたか。

結局、西鶴は、自らが序に掲げた「孝の一助」とするといふ

テーゼと、『二十四孝』の逆設定として不孝を語るという方法との矛盾の中に揺れ動いていたといわざるをえないのである。つまり、この戯作と教訓との揺れの度合を精確に算出することこそが、『二十不孝』における西鶴の創作意識を決定する鍵なのではなからうか。

註

- 1 従来の研究の整理は、谷脇理史氏の「『本朝二十不孝』論序説」国文学研究34集・昭41・10によった。
- 2 元、郭居敬選『二十四孝詩選』、御伽草子『二十四孝』、仮名草子『大倭二十四孝』の逆用であることについては、岩波文庫『本朝二十不孝』解説等参照。以下検討する巻二ノ四との関係などから、『本朝二十不孝』の本朝なる語は、天和四（貞享元）年から貞享四年まで毎年出版された（貞享四には『仮名本朝孝子伝』も出刊された）、藤井懶斎著『本朝孝子伝』の影響を考えるべきか。
- 3 『孝子説話集の研究近世篇』第八章第二の二「二十四孝からの逆設定」521～522頁。
- 4 浮橋康彦氏「『本朝二十不孝』における悪の造型」新潟大学教育学部紀要11巻1号・昭和44。
- 5 『西鶴と外国文学』45頁。
- 6 引用は、挿絵も含めて以下全て『日本古典文学大系38『御伽草子』による。
- 7 引用は、挿絵も含めて以下全て『定本西鶴全集三巻』による。
- 8 引用は、貞享三年八月西村孫右衛門刊本による。
- 9 『類船集』からの引用は、以下全て『近世文芸叢刊』所収本による。

- 10 横山重・小野晋両氏岩波文庫『本朝二十不孝』解説、257頁。
- 11 貞享三年八月、江戸清三郎大阪三郎兵衛刊『二十四孝諺解』23丁裏。
- 12 西鶴は、『諸国はなし』巻二ノ七「神鳴の病中」において、すでに兄弟の遺産相続争いを描いており、この一篇と比較した場合、この作が如何に『二十不孝』の一篇たるべく意図されたか、またその方法の相違も明瞭だが、今は省略する。
- 13 西鶴は、『諸国はなし』巻四ノ六「力なしの大佛」で、非力であった父大仏と違って、子供は大力で、「十五歳より。鳥羽の小佛とぞ名乗ける」の如く、全く同じ落ちを使用していた。
- 14 松田修氏は「石川五右衛門については、『慶長見聞集』巻七の記述が『本朝二十不孝』に最も近い。（中略）西鶴は先に『大下馬』三の一で「後は石川五右衛門より。伝授の昼盗の大事」と軽くふれ、『二十不孝』への準備をしていた」と指摘された。文学39巻8号、13頁。
- 15 『雍州府志』巻九「釜淵」の項に類似の記事がある。『新修京都叢書』10・678頁参照。
- 16 諺「龍ノ領ノ珠ヲトル」の典拠となった『莊子説話』『諺語大辞典』及び、徳田氏前掲書、531頁参照。
- 17 水野稔氏「西鶴探掘——『二十不孝』一二の素材について——」国語と国文学昭24・7及び前掲岩波文庫解説、251頁。
- 18 中村幸彦先生「西鶴と説話」日本文学56・2
- 19 九州大学文学部蔵、万治二年京都林和泉掾刊『宇治拾遺物語』巻八十九丁表。
- 20 『御伽物語』巻三ノ一・五ノ一のほか、『奇異雑談集』巻四ノ四等にもその由来を記す。猶、西鶴は自ら「好色」代女』巻六ノ三「夜覧の付声」に、孕女の事を書いている。

- 21 京都大学文学部蔵、延宝六年九月刊『御伽物語』巻三、五丁表。
- 22 『注好選集』上、『私聚百因縁集』第六など。猶、徳田氏前掲書、524頁参照。
- 23 国書刊行会『明良洪範』巻一、12頁。猶、徳田氏前掲書、525頁参照。
- 24 『説経正本集』一、283～284頁。
- 25 本文及び図版の引用は、慶安（四年？）・明暦二年刊の正本『さんせう太夫』が、共に結末を欠いたり、簡略化されたものであるため、文章の整った寛文中期刊と推定される『さんせう太夫物語』（上巻欠）によった。『説経正本集』一、529頁。同解説参照。猶、謡曲『土車』も考慮されるが、説経正本の挿絵がより適切のようである。『能楽大辞典』付図参照。
- 26 貞享三年八月刊『本朝孝子伝』下、41～43丁。
- 27 同右、50丁表。
- 28 柳田国男『山莊太夫考』、『定本柳田国男全集』六、109頁。
- 29 『説経正本集』一、343～344頁。
- 30 この借金取が、借金は取らず、逆に金を与えて帰するという趣向は、『枕久一世の物語』下「情の銭五百」で既に用いていた。
- 31 『曾根崎心中』の、お初が徳兵衛を縁の下に隠す場面等、あるいは謡曲の舞台を考えるべきか。
- 32 野間光辰博士『西鶴年譜考證』、同「西鶴五つの方法」二・三文学昭42・11 43・2。浅野晃氏「西鶴と歌舞伎・浄瑠璃―浮世草子の場の形成―」共立女子大学紀要第16輯 昭45・5、等参照。

受贈図書 46年4月～46年9月

万葉のいしぶみ

平家物語助詞助動詞索引

系譜別現代歌壇総覧昭和41年版附録共

訓点語と訓点資料43・44

毛吹草（岩波文庫）

松平文庫本賀茂保憲女集

松平文庫本土御門内大臣通親日記

特選名著複刻全集近代文学館作品解題

名著複刻全集編集委員会

早春譜

現代朝鮮語基礎語彙集

中世歌書翻刻第1冊慕風愚吟集

春日 和男

若木 太一

短歌研究社

訓点語学会

田中 道雄

今井 源衛

今井 源衛

井浦 安喜

梅田 博之

稲田 浩子